

に たん わり 二反割遺跡現地説明会資料

令和6年10月5日(土)

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団



大型土坑の集中範囲 南から

大型土坑(24SK32)の断面 北から

大型土坑(24SK19)の断面 北から



柱穴(SB121-24P34)完掘 東から

柱穴(24SB西-24P47)断面 南から

柱穴(24SB東-24P24)完掘 南から

3 第3次調査の遺構・遺物

第3次調査で現在までに、北側調査区と南側調査区を合わせて、掘立柱建物3棟(1棟は過年度の拡張)、土坑12基、井戸4基、溝9条、柱穴22基、性格不明遺構5基などが見つかっています。出土遺物は第1・2次調査同様に非常に少なく、土師質土器の皿、珠洲焼の甕・壺、須恵器の杯、土師器の甕などがありますが、いずれも破片で詳細な時期は判別できません。他に井戸から鉄滓なども出土しています。

北側調査区の遺構は非常に少ないので、集落の縁辺部と考えられます。北東端にある溝(24SD7)は、第2次調査の溝(15SD176)と走向が直交する位置関係にあるので、小規模ですが重要な区画溝と考えられます。集落の北側範囲を示す溝の可能性がありま。他に溝(24SD6)が、15SD1の延長方向で見つかりました。15SD1は計4回の造り替えが認められる溝で、道に伴う遺構と考えられています。

南側調査区では、多くの遺構があることから、遺跡範囲(集落)が南側に伸びることは確実です。掘立柱建物は現在3棟を見つけています。柱穴の中には、上写真のように柱当たりが明確なものがあり、径15～20cmの丸柱と考えられます。調査区東側で見つかった2棟は、規模は不明ですが、柱筋が直線的に配置され、中心的な建物の一部と思われます。調査区西側の2基の柱穴(24P33・34)は、第1次調査のSB121に伴うものです。この結果、SB121は南北4間(11.2m)×東西4間(7.6m)の総柱建物となり、平面積は約85㎡(約53畳)に及びます。二反割遺跡内では最大面積の建物となることから、倉庫以外の用途も考える必要があります。また、その建物の北東側では、大型土坑が集中する範囲が見つかりました。沢状に落ち込んでいる地形で、雨等の水が溜まりやすい環境です。深さは浅く、底面に起伏はありますが、基本的に平たく掘り込まれています。現段階では性格は不明です。

4 まとめ

二反割遺跡は、平安時代末～鎌倉時代初頭という貴族社会から武家社会へ大きく変革する時期に営まれた遺跡です。掘立柱建物が計画的に配置され、規模の大きな建物が存在するなど、領主層などの有力者が関わった遺跡と考えられます。今年度調査した館遺跡は、北東側に700m程離れた位置にある遺跡で、11・12世紀の集落遺跡です。また、堂古遺跡は飯田川を挟んで、西側に300m程離れた遺跡で、13～15世紀の集落遺跡です。二反割遺跡の前後の遺跡様相を把握することで、飯田川中流域における中世初期の歴史的背景が明確になってくるものと思われます。

1 遺跡の概要

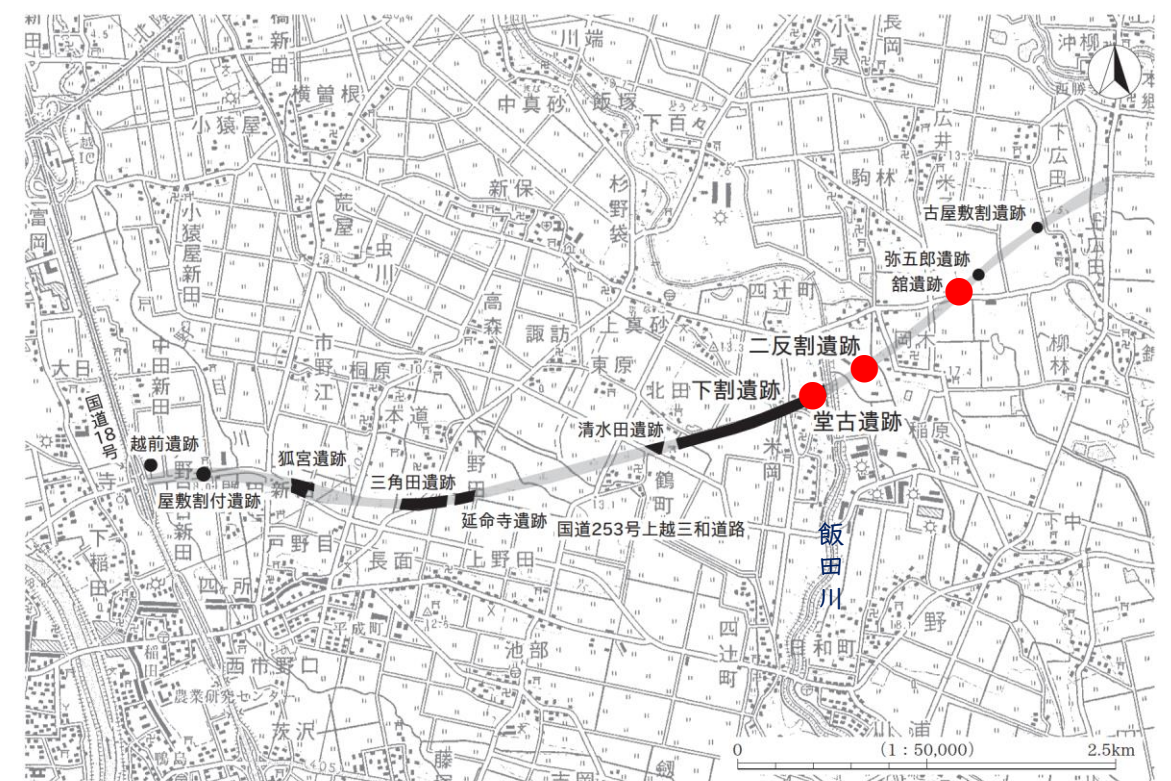
二反割遺跡は、上越市三和区岡木にあり、飯田川右岸の標高13.9～14.8mの自然堤防上に立地しています。

国道253号上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路(略称「上沼道」)の一部で、その事業用地内には、下図のように12遺跡が存在します。国土交通省と県が調整を行いながら、平成14(2002)年度から断続的に発掘調査を実施しています。



第3次調査区(赤丸)と上越三和道路(北東から)

令和6(2024)年度は、館遺跡(第4次)、堂古遺跡(第4次)、二反割遺跡(第3次)の順で調査を実施しました。いずれも水路部分を対象に、面積は館遺跡が288㎡、堂古遺跡が500㎡、二反割遺跡が840㎡になります。二反割遺跡では、平成23・27(2011・2015)年度に調査が行われ、約850年前の12世紀(平安時代末～鎌倉時代初頭)が主体の集落遺跡であることがわかっています。



上越三和道路と令和6年度調査遺跡の位置図 S=1/50,000
(国土地理院「高田東部」1:50,000原図2007年発行)

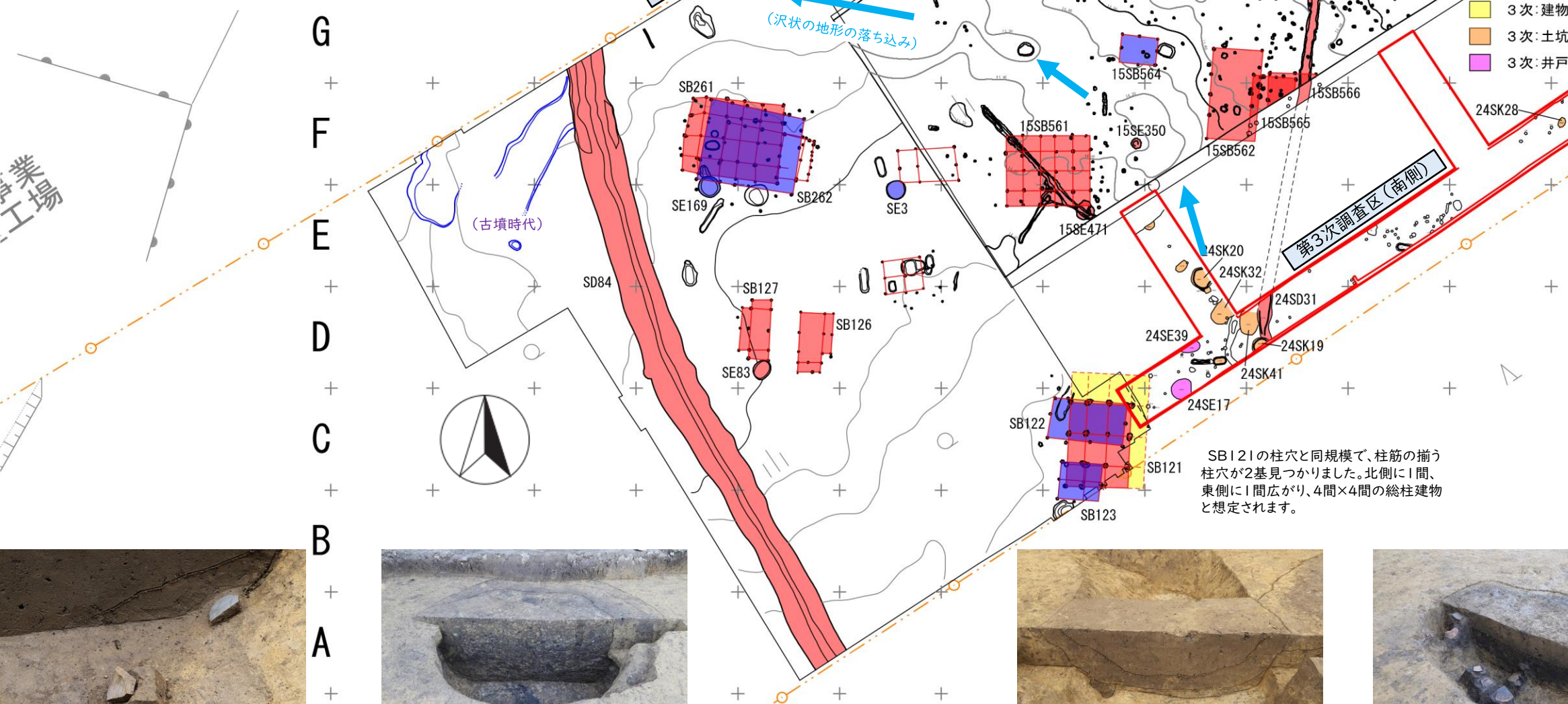
2 第1・2次調査(赤線枠以外)の成果

第1・2次調査では、掘立柱建物(以下、建物)23棟、土坑21基、井戸11基、溝33条、性格不明遺構3基などが見つかっています。また建物構成を把握できなかった柱穴も、多数見つかっています。図の色分けは、建物の長軸の向きでグループ化し、その時期に伴う遺構を示したものです。遺構に伴う遺物から、①赤色が12世紀前葉～中葉、②青色が12世紀後葉、③緑色が12世紀末以降と想定されています。無色は時期不明です。

①(赤色)は集落の成立期にあたり、建物12棟、井戸5基、区画溝1条、堀(大溝)1条などで構成されます。距離がある建物同士の柱筋を、揃えているように見えます。また、南西側の総柱の建物3棟と堀(SD84)が特に注目されます。堀は飯田川方面に構築され、上幅約5m、深さ2mもあります。集落側へ簡単に渡れない規模で、堆積土の分析では、水の流れない不安定な水位がある環境と想定されています。総柱の建物は、南側のSB121が柱穴の規模も大きく、柱の当たりも明瞭なことから、倉庫としての性格が想定されました。

②(青色)は、建物の向きが南北方向から東西方向へと変化する時期になります。建物6棟、井戸4基、堀(①から継続)などで構成されます。建物の柱筋が、①同様に揃えているように見えます。特に北東側の建物(15SB356)は、四面に廂を持つもので、古代的な様相が認められる建物と考えられています。

③(緑色)は、建物2棟、井戸1基、溝1条などで構成されます。遺構数が減少し、遺構全体の向きが大きく変わる時期で、集落の終わりの時期と考えられています。



井戸(24SE5) 東から



溝(24SD7) 東から



掘立柱建物の検出状況 西から



井戸(24SE39)/珠洲焼出土 南から



井戸(24SE17) 北から



溝(24SD31) 北から



土坑(24SK28) 東から



井戸(24SE27) 南から